令和３年4月20日発行

仙台稲作情報2021（第2号）

宮城県仙台農業改良普及センター　TEL：022-275-8410　FAX：022-275-0296
http://www.pref.miyagi.jp/sd-nokai　E-mail：sdnokai@pref.miyagi.lg.jp

管内における播種盛期（進行率50%）は4月10日頃（前年より２日早い）となりました。苗は概ね順調な生育となっています。

来月には田植え作業が始まり，今年産の稲作がいよいよ本格化します。「高品質宮城米づくり」の実現に向けて，以下の栽培管理のポイントを押さえ，良質米づくりをスタートさせしましょう。

栽培管理のポイント

▷田植えは植え痛みを防止するため，温暖無風日に行いましょう。
▷適正な水管理で，初期生育を確保しましょう。
▷雑草の葉齢を確認し，除草剤の散布が遅れないようにしましょう。

１　本田管理

移植栽培

（１）的確な田植え

①好条件での田植え

・温暖無風日に行います。田植時の低温は，苗の活着不良により初期生育を低下させます。また強風下での田植えは植傷みや浮き苗が発生しやすくなりますので，風速4m/秒以上の日は避けましょう。
・やむを得ず悪条件下で田植えをする場合は，田植え後，苗の葉先が少し出る位の深水で苗を保護しましょう。

②植付本数と栽植密度

・田植機の調整を行い，1株植付本数と栽植密度及び植付深を適正にするよう留意しましょう。植付本数は稚苗で４～５本/株，中苗で３～４本/株を目標にします。
・「だて正夢」は分げつ数が増えにくいので，栽植密度は60～70株/坪程度のやや密植とします。

（２）田植え後の管理

①生育初期の水管理

・田植直後の苗は根からの吸水が少なく茎葉からの蒸散が多いので，活着するまでは苗を保護するために葉先が２～３cm出る程度の深水とします。
・活着後は水深２～３cmの浅水とし，水温・地温の上昇を図り，初期生育量の確保（分げつの促進）に努めましょう。
・低温や晩霜の心配がある場合は，水深５～６cmの深水にします。

②除草剤の使い方

・多くの除草剤では使用時期の目安はノビエの葉齢になっています。雑草の葉齢を確認し，除草剤の散布が遅れないようにしましょう。
・代かきをていねいに行い，水田表面を均一にしましょう。田面が露出するとその部分の除草効果が低下します。

・除草剤散布後７日間は止め水とします。田面水が減少した場合は静かに補充し，継ぎ水を行います。
・同じ雑草が残るほ場では，同じ除草剤を連用せず，初期除草剤との体系処理を行いましょう。
・近年，スルホニルウレア（SU）を始めとするアセト乳酸合成酵素（ALS）阻害剤に広く抵抗性を示すイヌホタルイ，アゼナ，オモダカが県内で確認されています。除草剤を適正に使用したにもかかわらず特定雑草種のみが残る場合は，ALS阻害剤抵抗性であることが疑われますので，普及センターに相談してください。

③補植用残苗の処分
・補植用残苗は，6月になってもほ場に放置されている場合があります。いもち病の発生源となりますので，補植後は直ちに処分しましょう。

湛水直播栽培

（１）ほ場の均平
・ほ場の均平程度は苗立ちや除草剤の効果，稲の生育，収量に大きく影響するので，均平化に努めましょう。高低差は10cm以内が目安となります。

（２）出芽方法別の水管理と除草剤の使用
・湛水出芽（鉄コーティングなど）
播種時の初期除草剤の効果を保つため，播種後は速やかに入水し７日間湛水後（田面が露出しない場合は，途中からの補水はしないで自然落水させる），浅水管理に努め，出芽・苗立ちを促進させます。稲の本葉１～1.5葉期に再入水し，初中期除草剤を施用し，初期除草剤と同様の水管理とします。

・落水出芽（べんがらモリブデンコーティングなど）
播種後は走水を行い，翌日落水します。出芽するまで落水状態とします。出芽確認後は浅水で入水させ出芽を促します。稲の本葉１～1.5葉期以降，水が落ち着くのを待って初中期除草剤を散布します。

2　東北地方の向こう1か月の天候の見通し（4/15仙台管区気象台発表）

予報のポイント
〇東北太平洋側では，天気は数日の周期で変わり，平年と同様に晴れの日が多い見込みです。
〇平均気温は，高い確率が50％です。

■農薬の適正使用について
・ラベルに記載されている適用作物，使用時期，使用方法等を十分に確認しましょう。
・ラベルの注意事項にある「注意喚起マーク」の表示に従い，適切な保護具を着用しましょう。
・散布後には農薬の使用履歴を記帳しましょう。

■令和３年春の農作業安全確認運動実施中（令和３年4月1日から令和３年6月30日まで）
運動スローガン　「見直そう！農業機械作業の安全対策」
近年，様々な農業機械の普及，農業従事者の高齢化等により，機械操作のミス，過信と慣れによる安易な作業が重大事故に結びつき，農作業死亡事故者数は年間300人前後で推移している状況です。特に死亡事故の発生割合が高い乗用型の農業機械の作業におけるシートベルト・ヘルメットの着用徹底など一層の事故防止に取り組みましょう。

次回の稲作情報第3号は，6月10日に実施する生育調査の結果をもとに6月11日頃の発行となります。仙台農業改良普及センターホームページにも掲載しますので，ご覧ください。